

特集のとびら

「シュル シュルー」

教育研究所主任指導主事 中内 則之

「えっ、“かんな”なんて、初めて聞くよー」

「これが鉋（かんな）。じゃあ、一度やってみるからね」

作業台に、試験材料を置き、生徒の前で示範する。「シュツ」という音とともにシュルシュルツと鉋屑が出る。「すっげー」という生徒の驚きの声。

「先生、もう一回やって見せてよー!」「みんな、やってみる?」「やる、やる!」

班ごとに試験材料と鉋を配る。

「じゃあ、みんなの番だよ!怪我に十分注意してやってみよう」

「あつれー、先生みたいにいかないなー」「“かんな”動かないよー」

「そうだ!先生の“かんな”だけ特別に切れるやつなんだよ。交換しちゃおう」

「やっぱり、だめか?」

などなど、教室は驚き、ポヤキ、つぶやきの声でいっぱい。次第にポヤキの内容が変化する。

「ねえ、ねえ、こうするといいよ」「鉋台を上からしっかり押さえるといいよ」「同じ速さで動かすといいよ!」等、試行錯誤の末に発見した生徒たちなりの“コツ”の共有が始まる。

生徒の目は輝き、「できた!」「やったー」「俺、うっめー、大工さんになるのかな?」

「〇〇さん、上手になったねー。□□さんにも教えてあげてね」

削りすぎてすっかり薄く、ペラペラになった試験材料を手に、「先生、新しい材料ください」と声が響く。生徒の生き生きとした表情が印象的だった、技術・家庭科の授業風景である。

本さいたま市が推進している「潤いのある教育」を具現化するためには、落ち着いた学習環境の中で、児童生徒一人ひとりが生き生きとした表情で主体的に学習する授業づくりが大切である。

児童生徒の学習意欲が高まるような場面設定を行い、学習に引き込む言葉掛けをすることが第一歩。次に、「うまくできない」「分からない」という子どもたちの葛藤を読み取り、意欲を継続させる言葉掛けが第二歩。そして仕上げの第三歩は、聞いている周囲の子どもたちに「なるほど」と思わせる適切な評価を意識した言葉掛け。

学習に対する興味・関心を高め、教室内の全児童生徒に適切な学習課題を与えることで、全ての授業において豊かな学びが実現すると信じている。

「生き生きと学ぶ授業をつくる」